

□上野益三：薩摩博物学史 317 pp. 1982. 島津出版, 東京. ¥3,500. 「日本博物学史」の著者として令名高い上野益三博士はこのたび「近世薩摩博物学史」を世に出された。一地方の博物学史をこのように綿密に明確に著述することで、上野博士の右に出る人はいない。博士はその専門の陸水学に関しては既に「陸水学史」を著わされた。また本草家、博物学者の活躍の跡を尋ね、墓石の苔を掃き、碑文を読み、先人の功績を偲び、その記事は「博物学史散歩」に結実した。足跡は長崎をはじめとして、京阪神はもとより、東京、函館と各地に及ぶ。その「散歩」の原稿枚数をはるかに越える「薩摩博物学史」は新たな構想のもとに情熱を燃やして取り組まれてできたものである。

南国の長崎は西の海に、鹿児島は南の海にその港を開き、外国からの文明、文化、産物を迎え入れた。長崎が幕府直属の地であり、オランダ屋敷に、あるいは唐屋敷に外国人の居住が許されたのに対し、鹿児島は薩摩一藩の支配するところであった。両港の間に大きな差があり、長崎の地は広く世に紹介されてきたが、鹿児島は秘められてきた。かつて鹿児島を訪れ、山紫水明の磯庭園に遊び、煙の立つ桜島の眺めをほしのままにし、振りかえればそこに孟宗竹のすがすがしい緑があった。上野博士の筆に詳しいように、モウソウチクと呼ばれる江南竹も、サツマイモと呼ばれる甘藷も、サトウキビと呼ばれる甘蔗も、国府タバコの名を思わせる煙草も、すべて鹿児島に海外から移し植えられ、日本全国に広まったものであることに改めて気がつくのである。薩藩の名君、島津重豪は世にいう田沼時代の關達の気風の中に活躍し、田沼が失墜し、家齋が將軍となり松平定信が政権を握る天明七年に四十三才で隠居し、本草家の曾繁を秘書に用いて「成形図説」の編著に当らせたのである。曾繁は幕府任用の本草学者で、「琉球産物誌」の著者の田村藍水に学んだ藩臣、白尾国柱と共に「成形図説」百巻の完成に力を尽した。

島津重豪はリンネ最高の弟子のツェンペリーと時代を共にしたが、長命の彼は文政9年、曾孫の齋彬を伴い参府するシーボルトを江戸に暖く迎えることができた。それはこの明敏な若者に強烈な印象を与えずにはおかなかった。島津齋彬は惜しくも50才の短命で、治政わずか7年ではあったが、蘭学を奨奨し御花園製煉所を創立して西欧技術の研究を推進したのである。彼は江戸において博物学愛好家の会、緒鞭会を主宰する富山藩主前田利保と深く交わり、半世紀も目の目をみなかった「質問本草」が刊行された。

上野博士の筆は明治に及び、鹿児島城下に生れた田代安定の熱帯樹木栽培の苦勞、造士館教授、伊藤篤太郎の「琉球植物誌」の著作など述べて余すところがない。世人、多くは北海道開拓の苦心について語るが、緑濃い南方の草木虫魚の研究、その資源探究の苦勞を忘れやすい。緑の樹林と碧海の魚介の保存と利用のためにも、まずその研究の歴史に思いを至すことが大切であり、この困難な仕事を完成された上野博士に、あらためて絶大な敬意を表する次第である。本文の他に無ページの年表索引がある。

(木村陽二郎)